

【BPプログラムの取り組み】 兵庫県三木市

大きな展望をもたらしてくれたBP

社会福祉法人 神和保育園 地域子育て支援担当保育士 岩谷 真由子

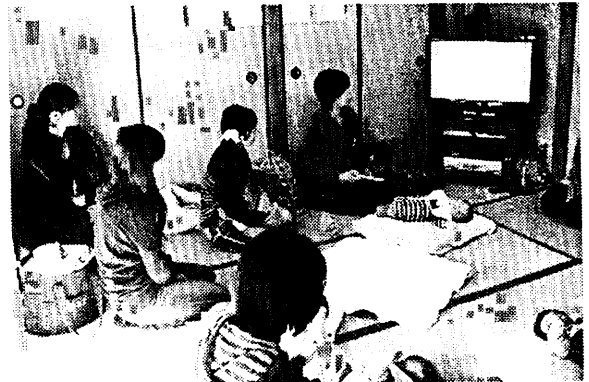
東奔西走の毎日

私は、民間保育園で地域の子育て支援担当として勤務し、支援に携わって11年が経とうとしています。1月に行われた「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた!”(愛称BP)」の養成講座を修了した私は、勢い勇んで今年度中の実施を早速計画しました。10人以下ならファシリテーターは1人でよいこと(この場合は、一人のアシスタントを必要とします)、母子同室のため託児の協力者が不要なこと、一部屋あれば実施できること等、NPでは保育園での実施に際してネックになっていたことが、このBPではクリアできたからです。

すぐさま募集要項を作成し、協力の依頼を求めることにしました。まずは市の保健センターへ向かい、保健師さんや助産師さんに赤ちゃん訪問でのアウトリーチをお願いしました。また、乳児健診や離乳食クッキングがあると聞けば行き、近くの小児科で予防接種日があると聞けば行き、自ら声かけをするとともに、市民病院のおっばい外来や地方新聞での告知、社会福祉協議会やボランティア活動プラザなどへの協力を求め、東奔西走の毎日でした。とにかくさまざまな機関へ積極的に掛け合ってみました。また、毎回セッションの最後30分間に設定されている「専門職の方を招いての個別相談会」のご協力も重ねてお願いして回りました。

最低基準クリアだ!

けれども、悲しいかなちょうど季節は極寒の冬、1月や2月と言えば、お母さんにとってはまだ、BP前期の対象となる2~4ヶ月の赤ちゃんを連れて出る場所も必要がないのでしょうか。本当にほとんど見かけることがないのです。たまたま対象の方を見つけてチラシを渡し誘ってみても、見慣れない「BPプログラム」の文字にあまり関心を示されないばかりか、怪訝な顔をされる方も多かったのです。そんなこんなであったという間に募集締め切り日を過ぎてしまいました。その時点での申込者は、保健師さんや助産師さんからのアウトリーチが2名と、新聞の記事を見ての応募が1名の計3名だけでした。実施日はどんどん近づいてくるし参加者は増えない。こんな少人数でも実施は可能かと事務局に尋ねると、「最低5名で」とのこと。専門職のみなさんには既に依頼してしまっているし、何とか実施したいという私の思いもあるし・・・と、どうしても諦めきれませんでした。その後、さらに声かけの協力者を同じ職場で働く保育士に、また園児の保護者にと、本当に藁をもつかむ思いで求めました。その甲斐あってか、実



施初日の前日に2名申し込みがあったのです。「これで5名。BP実施の最低基準クリアだ!」..本当にほっとしました。5名分の準備を整えて当日を迎えた朝にもう1名の申し込みがあったのには正直驚きましたが、それでも嬉しいことでした。結果、晴れて6名の参加者で実施できることになりました。

これなら行けそう

ところで、養成講座のとき模擬セッションを終えた受講者たちの一番の気がかりと言えばNPとの大きな違い、つまり「母子同室であること」でした。赤ちゃんが泣く、おっばいを欲しがると、オムツを変える等、お母さんが集中できない状況にファシリテーターやアシスタントがどのように関わるか?その場の空気はどう違うのか?実際に想像しにくいセッションの現場の様子でした。私の不安も同様でした。

けれども迎えた初回は、まさに案ずるより生むが易しで、開始直後より楽しい場となったのです。その要因としては、何にも増して赤ちゃんが一緒にいること、まさにそのことだったのは発見でした。初対面の人とでも赤ちゃんを介して会話の糸口が見つかるので、すぐにおしゃべりが始まります。(NPでは、なかなかこのようには行きませんよね。)そしてBPの場合、セッション計画自体は予め用意されていますので、ファシリテーター(Fa)がしっかりと頭でシュミレーションし、テキストやDVDを予習しておくことで、不思議と時間通りに進行していくのです。(つい時間が押してしまい、終了時間が遅れるという場面も多かったNPとは大きな違いです。)BPプログラムのセッション計画自体が、念入りにしっかりと計画されたものであることを実感しました。「互いの関心事を知る」というアクティビティでは、参加した母親たちの気がかりは基本的に同じであることを互いに確認し、思いを共有できたことで、さらにディスカッション(おしゃべり)は弾みま

協力を求めたことが支援機関の垣根を低くしてくれた

した。最後の一人一言では、「最初は、時間通りに4回もあるのは大変とと思っていましたが、これなら続けて参加できそう」「ここで話をすると、みんな思いはおんなじと思いました」などと発言されました。そんな感じであつという間に終えた初回「これなら行けそう…」そんな感触でした。

考えてこそ守ろうとするルール

さて、回数を重ねていくと一つだけ困ったことがあります。「ルールの確認」です。NPでは参加者みんなで考えたルールでしたが、BPではあらかじめ書き出したルールを用意します。参加者がうちとけ距離を縮めていくにつれて、遅刻者が出る、つい私語も増える、ケータイが鳴る、話題が横道にそれていく…等々、参加者を中心としてみんなでつくっていく場という一体感、そんな空気感が少し危うい状況になってきました。結局、何か困ったことが生じるたびにFaが参加者に確認しながら、徐々にルールが増えていきました。ルールの設定は、参加者が考えてこそ共通認識を持って積極的に守ろうとするのだと改めて思いました。時間を少々取られても、ルールについてはもう少し時間をかけた方が、後々問題が少ないのかもしれませんが、少し意外なところで見つけた気づきでした。

許され互いを認める場

それから、BPでは必要以上にFaやアシスタントが赤ちゃんの相手をしないことが原則です。もしも赤ちゃんが泣いてお母さんがセッションに集中できなかつたとしても、そこで私たちが赤ちゃんを抱いたりあやしたりということはしないのです。例え母親がその場をしばらく離れることになったとしてもです。その点をFaとアシスタントが初回からしっかり意識して参加者と関わったことで、その後のセッションが進めやすくなった気がします。母親たちは、赤ちゃんが泣いても頼れないと認識したことで、何とかその場に参加し続けられるように工夫をしました。立ち上がったたり、少しだけ動き回ったりしながらも、他の参加者の発言に耳を傾けていました。それが許される場として各自が受けとめ、互いを認めることで、一人ひとりの安心感を生んでいたことも間違いのないでしょう。

BPの特徴

また、BPのセッションの特徴としてNPには無いものもいくつかあります。

まず「親子ふれあいタイム」では、基本の抱っここの仕方から始まり、赤ちゃんマッサージや体操、「抱っこ大会」と名づけられたよその赤ちゃんを抱っこする体験というものまであり、2回目以降のセッションの初めに組まれています。ほんの5分程度のものですが、母親たちがとてもいい表情

で過ごされるひと時です。その日のセッションに参加者の期待感を持たせてくれるいい導入となります。

次に「基礎知識の整理」では、DVDの内容が大変わかりやすく簡潔に構成されているので、その後のディスカッションも含め、参加者たちの様様な気づきにつながります。

そして4回目（最終回）のセッションには「ピエロバランス」というツールを必ず取り上げるようになっていきます。赤ちゃんの誕生で変化した母親を取り巻く環境や心の健康状態のバランスを自覚することで、親が親として育っていくことを目指すものです。最終回に来て、参加者たちが一番混乱した表情を見せる時間です。Faにとっても一番の難所かもしれません。私も実際やってみて、その説明の難しさは実感しました。もっとかみ砕いてうまく説明しなければと焦る気持ちもありましたが、あとで参加者アンケートをとってみると、意外にも「ピエロバランス」の評価が高かったのでびっくりしました。すぐに理解できなくても、意識の中に留めることで何かを得ていることを参加者本人たちも実感しているのかも知れません。

もう一つ、テキストも毎回使用しました。コンパクトサイズなので、気負わず読める点と、荷物の多い母親たちの負担にならない軽さの点で、受け入れられているようです。

そうして迎えた最終日、修了証を受け取った母親たちが最後に寄せてくれた言葉は「心の余裕がうまれた」「考え方を変えたら楽になることもあると気づいた」「同じ悩みを持つ仲間がいることで心強かった」「とても楽しかった」などでした。また「BPでの事を、夫がとても興味を持って聞いてくれた」と明るい表情で話されたのも印象的でした。

地域の子育てセンターとして

今回は、少々見切り発車的な部分もあったことは正直認めませんが、一民間保育園の子育て支援にも大きな展望をもたらしてくれました。BP実施に際して多くの方々に協力を求めたことが、結果的に別々のところで行っていた支援機関の間の垣根を低くしてくれたのではないかと感じています。今や保育園は園児だけを保育するところではなく、地域の子育てセンターの役割も担っています。同じ目標を持った機関が、お互いを理解しあい連携していくことで、より親たちが安心できる環境や社会を生み出すこととなるに違いありません。



「子育ての仲間づくり」「親子の絆づくり」そして「子育て知識の獲得」を目指して、各機関との繋がりを大切に、小規模ながらこれからもBPプログラムを継続して実施していきたいと思っています。